

優人の

ちよつと一息

フェルマータ

第1回へはじまりはフェルマータ

鈴木優人 (指揮者/クリエイティブ・パートナー)



みなさま、はじめまして。この4月より読響の指揮者陣に加わりました鈴木優人と申します。『月刊オーケストラ』に時折コラムを書くことになりました。

「フェルマータ」とは、ご存知の通り音楽上の停止のことです。音符の上に☺をつけるだけで、本来の音価より長く伸ばしたり、あるいは逆に短めに切り上げたりすることができます。古くから賛美歌などの節目に置かれた、時間が止まる記号です。

また音符のみならず、休符や終止線など音が出ないところにもフェルマータをつけることが可能で、その場合も休みの長さは演奏家や指揮者に委ねられます。しかし作曲家によっては、記号の上に「lunga!(長く!)」などと思いの丈を連ねたり、あるいは△(短い)や◡(長い)という変化球を使って長さを書き分けてきたりもします。「そこまでするならいっそのことリズムで書いてよ」と思っていますが、普段は譜面にがんじがらめに縛られた演奏家に与えられる「小さな自由」がフェルマータ。作曲家もそれを承知の上で絶妙なところに置いてくるのです。有名な「運命」交響曲で我々を悩ませ続けているのもこの小さなマーク。

さて、いま音楽界は未曾有の危機に見舞われています。いわば長いフェルマータの中にいて、見えない小さな指揮者が指揮棒を振り上げたままいつまでもやめてくれない、そんな風感じられてなりません。フェルマータのことをイタリアではなんと「コロナ」と呼びます。王冠(corona)のような形からそう呼ばれるのでしょうか。まさにコロナとはフェルマータのことなのです。

今月の読響定期の第一音はシューベルト:交響曲第4番の「ド」。いきなりフェルマータがついたユニゾンで始まります。フォルティッシモのフェルマータか、それとも残念ながらお休みのフェルマータか、まだわかりませんが、いずれにしても読響のみなさんとの3年間の忘れ難い出だしになることは間違いありません。クリエイティブ・パートナーとして「フェルマータは音楽家に与えられた自由」と前向きにとらえ、この時期にできることを模索していきたいと思います。

※このコラムは不定期で掲載します。